

農 作 概 況

〔水 稲〕

1. 作付の概況

九州における平成2年度の水稲作付面積は252,200haで、前年に比べ3,300ha（1%）減少した。作付面積の減少は前年より少なくなったが、減少率としては前年と同程度で、依然として作付面積は減少傾向にある。

2. 作柄の概況

九州における平成2年産水稲の収穫量は、121万tで、前年産に比べて4万6000t（4%）減少した。これは作付面積の減少に加えて、10a収量も480Kgと、前年産に比べ12Kg（2%）少なくなったためである。水稲の作柄は九州平均では101と「平年並み」であった。県別では、長崎県、宮崎県、鹿児島県が「やや良」で、福岡県、佐賀県、熊

本県が「平年並み」で、大分県が「やや不良」であった。

3. 生育概況

1) 普通期水稲

田植期は、早・中生種の作付面積の拡大、さらには苗の生育も順調で平年より2日程度早まった。

本田の生育は、移植後の好天、分けつ期の高温多照により葉数、分けつ数とも多く確保できたが、mあたり穎花数は北部では並～少なめとなり、中・南部九州で平年を上回った。

出穂期は、九州全体として平年より2～7日早くなった。

登熟は、出穂期の早まりに加えて登熟食の高夜温の影響で著しく早まり、収量は中・晩生種と熟期の遅い品種程低下した。また9月中旬からの台風連続襲来の影響で日照不足となり、さらに倒伏等により登熟、収量は低下した。

品質は、高夜温の影響で成熟の極端に短縮された地域及び台風19, 20, 21号による倒伏被害の顕著な地域で低下した。

2) 早期水稲

九州中・北部地域での早期水稲の作付がさらに増加した。本年の生育概況をみると、活着期の低温で初期生育がやや不良であったが、5月半ば以降の高温多照により生育は回復した。しかしmあたり穎数は平年に比べ少なめであった。出穂は生育後半における高温多照の影響で早まり、その程度は北部九州で顕著であった。

登熟は、出穂後の高温多照により全体的に早まり、出穂期の早進化と相まって特に福岡では9～17日も早くなり、北部九州の収量は前年をかなり下回った。早期水稲の主要地帯である宮崎、鹿児島両県では登熟期間の気温が高温に経過したが、水稲の生育ステージとの関連でみると、北部九州ほど顕著ではなく、一方多照に恵まれたため、品質・収量とも平年を上回り、作況指数が108と作柄が「良」であった。

4. 被害の概況

気象被害としては、6月30日～7月2日の集中豪雨による中・北部九州での浸冠水、流失埋没、土砂流入の被害、また7月上旬～9月上旬にかけての異常高温による登熟不良、さらには9月上旬～10月上旬にかけての秋雨前線と台風19, 20, 21号による日照不足や倒伏、穂発芽等の風雨害（鹿児島、宮崎、大分県）があったものの、台風による早期作への被害がなかったため、全般的には平年を0.1ポイント下回った。病害としては、高温の影響で紋枯病、もみ枯細菌病の被害が多かったが、いもち病の被害は少なく、地域全体としては平年を0.1ポイント下回った。虫害としては、ウンカ類の発生は多かったが、適期防除によりその被害は軽微であった。

1990年産水稲の収穫量及び被害程度

区 分	作 付 面 積	10 a 当 たり 取 収 量	取 収 量	作 況 指 数	前年との比較					
					作 付 面 積		10 a 当 たり 取 収 量		取 収 量	
					対 差	対 比	対 差	対 比	対 差	対 比
	ha	Kg	t		ha	%	Kg	%	Kg	%
九州計	252,200	480	1,210,000	101	△3,300	99	△12	98	△46,000	96
福岡	52,700	490	258,200	100	△ 800	99	△16	97	△12,500	95
佐賀	35,300	516	182,100	100	△ 600	98	△19	96	△10,000	95
長崎	19,400	443	85,900	103	△ 200	99	△13	97	△ 3,500	96
熊本	52,200	497	259,400	101	△ 600	99	△20	96	△13,600	95
大分	32,700	461	150,700	98	△ 500	98	△26	95	△11,000	93
宮崎	26,700	453	121,000	102	△ 300	99	15	103	2,700	102
鹿児島	33,200	459	152,400	105	△ 400	99	10	102	1,500	101

(単位：%)

区 分	総合	気象被害			病 害			虫 害	
		風水害	いもち病	紋枯病	もみ枯細菌病	ウンカ			
九州計	本 年	10.5	4.8	2.4	3.7	1.0	1.2	1.8	1.0
	対平年差	△1.2	△0.1	△0.2	△1.1	△1.3	△0.1	△0.1	△0.2
福岡	本 年	7.7	4.2	0.9	2.3	0.4	0.5	1.0	0.6
	対平年差	△2.0	△0.3	△1.1	△1.3	△1.2	△0.4	△0.4	△0.3
佐賀	本 年	10.1	3.8	2.4	4.8	0.4	2.1	1.4	0.4
	対平年差	△2.1	△1.9	0.1	△0.2	△1.3	△0.9	△0.1	△0.5
長崎	本 年	10.2	2.4	1.8	4.2	1.0	0.4	3.6	2.6
	対平年差	△3.5	△4.4	△2.8	△0.4	△1.1	△0.2	1.4	1.1
熊本	本 年	9.0	4.6	1.7	3.1	0.7	1.1	1.2	0.6
	対平年差	△0.6	0.6	△0.3	△0.7	△1.2	0.5	△0.5	△0.3
大分	本 年	16.1	11.1	5.8	2.7	1.2	0.7	2.2	1.5
	対平年差	4.8	5.9	3.6	△1.8	△2.1	0	0.8	0.5
宮崎	本 年	9.8	3.5	2.8	4.3	1.9	1.0	1.9	1.1
	対平年差	△5.7	△1.4	△0.6	△3.7	△2.6	△1.0	△0.6	△0.2
鹿児島	本 年	13.7	3.2	2.8	6.1	2.5	2.2	3.4	1.7
	対平年差	△2.3	△1.4	△0.9	△0.4	0	0	△0.5	△0.9

注) 1. 資料「農林水産統計速報2-60(作統-10)」

九州農政局統計情報部

2. △印は“少ない”を示す。

3. 対平年差は、被害率の差をポイントで示したものである。

以上のように本年は、気象被害、病虫害の発生が少なく、被害総合としては平年対比で1.2%の低下となったが、前年の比べると被害程度は大きかった。

(九州農業試験場水田利用部)

〔麦 類〕

1. 作付の概要

九州における麦類の作付面積は、4麦計で81,200haで、前年より12,600ha (13.4%) 減少した。麦種別では、小麦が47,900haで前年より11,000ha (18.7%)、二条大麦が32,700haで前年より1,300ha (4%)、裸麦が490haで前年より251ha (34%)、それぞれ減少した。六条大麦は、44haとわずかな作付となった。田畑別の作付面積は、田作が75,500ha、畑作が5,670ha (4麦計) であった。県別では、小麦が福岡の2,500ha減を最高に各県とも減少し、二条大麦が佐賀で500ha増加したが、他県では微減し、裸麦は大分で104ha減、長崎で94ha減等各県ともに減少した。

2. 作柄の概要

九州全体の収穫量は、小麦155,400t、二条大麦109,900t、裸麦1,370t、六条大麦177t、4麦計では266,800tであった。前年に比較して、小麦が7,600t (5%)、裸麦が520t (28%)、六条大麦が161t (48%)、それぞれ減少し、二条大麦が2,200t (2%) 増加し、4麦計では11,538t (4%) 減少した。小麦、裸麦及び六条大麦の収穫量の減少は、作付面積の減少によるものであり、二条大麦の収穫量の増加は、長崎及び鹿児島以外の作況指数が平年を上回っていたためである。10a当たり収量と作況指数は、九州全体で、小麦300Kg (108) の「良」、二条大麦310Kg (108) の「良」であった。

麦種別及び県別の作柄は、小麦では長崎と鹿児島が「不良」であったほかは「平年並み」～「良」であった。二条大麦では、長崎が「不良」であったほかは「平年並み」～「良」であった。一般的に、登熟期の天候に恵まれ作柄が良くなった。長崎の小麦及び二条大麦の作柄が劣ったのは、湿害の影響とみられる。

3. 生育概要

11月後半の気温はやや低めで降水量も少なく、12月前半の気温は高めで降水量が少なめで、播種は順調であったが、乾燥のため出芽はやや長びいた。その後、12月後半から3月にかけて高温多雨に経過し、徒長気味の生育となった。4月後半に低温・寡雨・多照となり、5月は平年並みの気象となった。このため、平年に比較して出穂は7～10日程度早く、登熟は順調に進み、成熟期は2～7日程度早くなった。小麦は穂数が多く、千粒重が重く、作柄が良かった (福岡)。二条大麦は被害粒も少なく品質も良かった (佐賀)。

4. 被害の概要

九州における本年の総合被害率は、小麦13.6%、二条

1990年産麦類の収穫量と被害状況

麦・県別	作付面積 ha	10a当たり収量		10a当たり 平年収量 Kg	作況 指数	
		収量 t	Kg			
全国	260,400	365	951,500	348	105	
九州	47,900	324	155,400	300	108	
小	福岡	17,400	354	61,600	318	111
	佐賀	9,380	362	34,000	300	121
	長崎	3,350	257	8,610	285	90
	熊本	9,250	276	25,500	275	100
麦	大分	7,970	307	24,500	304	101
	宮崎	232	251	582
	鹿児島	324	195	632	237	82
二条	全国	73,900	344	253,900	338	102
大麦	九州	32,700	336	109,900	310	108
	福岡	6,350	337	21,400	312	108
	佐賀	16,300	355	57,900	318	112
	長崎	1,350	262	3,540	306	86
	熊本	3,490	312	10,900	297	105
麦	大分	2,340	345	8,070	306	113
	宮崎	775	284	2,200	277	103
	鹿児島	2,130	275	5,860	279	99
裸	全国	7,590	298	22,600	349	85
麦	九州	490	280	1,370
	福岡	2	270	5
	佐賀	20	310	62
	長崎	233	257	599
	熊本	38	271	103
	大分	156	323	504
	宮崎	26	234	61
	鹿児島	15	227	34

県別	小麦		二条大麦		裸麦	
	被害率 %	平年差 %	被害率 %	平年差 %	被害率 %	平年差 %
全国	15.1	△ 1.6	16.8	△ 1.3	29.4	8.7
九州	13.6	△ 7.8	13.3	△ 7.6
福岡	9.7	△ 10.8	12.7	△ 6.4
佐賀	7.7	△ 18.4	13.3	△ 9.7
長崎	19.9	△ 6.4	24.9	4.3	18.7	△ 7.1
熊本	22.0	△ 0.8	10.9	△ 12.1
大分	17.1	△ 1.4	10.8	△ 2.9	10.8	△ 2.0
宮崎	11.3	△ 3.1
鹿児島	14.6	△ 6.8

注) 1. 資料: 「平成2年産4麦の作柄・被害状況」

農林水産省統計情報部作物統計課。

2. ...は事実不詳または調査を欠くもの。

3. △は減を示す。

大麦13.3%であった。これを平年と比べると、小麦が7.8%、二条大麦が7.6%少なかった。小麦では各県とも被害率が減少したが、湿害が長崎16.2%、熊本15.8%、大分12.7%発生した。二条大麦では長崎を除いた各県で被害が減少したが、湿害が福岡10.8%、佐賀10.0%、長崎21.6%発生した。病害は各県とも発生が少なかった。

(九州農業試験場水田利用部)

〔カ シ ョ〕

1. 作付の概況

本年の九州及び沖縄におけるカンショの作付面積は、28,653haで前年の約2%減であったが、本地域は依然として主要生産地であり、全国作付面積の47%、鹿児島県だけでも33%を占めた。

2. 作柄の概況

挿苗期は早掘る栽培の増加などから平年並みないし6日程度早く、活着も一部の寡雨県を除き、平年並みないしやや良であった。活着後の生育は佐賀、長崎では高温・寡雨のため抑制され、着いも数もやや少なかったが、他の県では茎葉の生育は平年並みないしやや良で、着いも数は平年並みであった。いもの肥大は九州の主産県では7月中旬以降の寡雨により一時抑制されたが、8月以降適雨に恵まれ回復し、平年並みないしやや良であった。他の県では9月中旬以降の高温・多雨等により肥大がやや不良となった。九州と沖縄の作柄は「やや良」と「やや不良」である。

(九州農業試験場畑地利用部)

1990年度カンショ作付面積と収穫量

県別	作付面積	10a当たり収量	10a当り収量	作況指数(対平年比)	前年との対比				
					作付面積		10a当り収量		
					対差	対比	対比	対差	対比
	ha	Kg	t		ha	%	%	t	%
全国	60,600	2,310	1,402,000	102	△1,300	98	100	△29,000	98
九州	28,200	2,620	737,600	102	△600	98	101	△11,400	98
沖縄	453	2,120	9,600	95	26	106	93	△90	99
福岡	358	1,480	5,300	96	△12	97	94	△510	91
佐賀	272	1,870	5,090	95	△7	97	94	△460	92
長崎	1,640	1,860	30,500	92	△110	94	89	△6,300	83
熊本	1,520	2,430	36,900	105	0	100	101	300	101
大分	535	1,890	10,100	99	△32	94	101	△600	94
宮崎	4,030	2,610	105,200	106	△40	99	105	3,900	104
鹿児島	19,800	2,750	544,500	101	△500	98	101	△7,700	99

注) 1. △印は減少を示す。

2. 資料は農林水産省統計情報部農林水産統計速報2-262(作統-20)による。

〔大 豆〕

1. 作付の概況

本年度の大豆作付面積は全国で145,900haで、前年より5,700ha減少した(前年対比96%)。九州では作付面積が23,900haで前年対比97%とやや減少した。県別では福岡、佐賀及び長崎が微増ないし現状維持なのに対し、熊本、大分、宮崎、鹿児島及び沖縄で減少した。

2. 作柄の概況

梅雨期間の降雨日数が少なかったため、播種期は平年よりやや早くなった。発芽は7月中旬までに播種されたものは良好であったが、7月下旬以降に播種されたものは晴天で土壌が乾燥し悪くなった。7月中旬以降は高温・多照であったため生育は順調で、開花期は平年よりやや早くなった。9月以降はハスモンヨトウが各地で多発し、9月中旬以降には秋雨前線が停滞し、さらに台風19号、20号の影響を受けたため、結実は不良となった。殺虫剤の散布回数は平年より多かったにもかかわらず、効果は十分でなく青立する株もみられ、成熟期は遅れた。作況指数は全国の85(10a当たり収量は151Kg)に対し、九州は89(158Kg)の「不良」であった。特に福岡と佐賀は作況指数80と83で不作であった。これに対し長崎は100、熊本92、大分96で比較的減収程度が小さかった。

(九州農業試験場作物開発部)

1990年度大豆作付面積と収穫量

県別	作付面積	10a当たり収量	10a当り収量	作況指数	前年との対比			
					作付面積		収穫量	
					対差	対比	対差	対比
	ha	Kg	t	%	ha	%	t	%
全国	145,900	151	220,400	85	△5,700	96	△51,300	81
九州	23,900	158	37,700	89	△700	97	△10,200	79
福岡	4,850	136	6,600	80	30	101	△2,940	69
佐賀	5,220	142	7,410	83	160	103	△2,690	73
長崎	1,800	150	2,700	100	0	100	△900	75
熊本	5,320	189	10,100	92	△500	91	△2,100	83
大分	4,380	161	7,050	96	△130	97	△660	91
宮崎	1,450	159	2,310	88	△60	96	△380	86
鹿児島	917	167	1,530	89	△173	84	△570	73
沖縄	2	110	2	...	△5	29	△5	29

注) 1. △印は減少を示す。

2. 資料は農林水産統計速報による。

〔野 菜〕

1. 概況

1-2月の高夜温と寡日照により冬春野菜は軟弱徒長気味に生育し、草勢や品質収量の低下が目立ったが、それ以後の好天により順調に生育した。夏秋野菜は7月2日の大雨により、被害を受けた。その後は高温乾燥で経過し、発芽や生育不良、果菜類の活着不良、イチゴの花芽分化の遅れなどが認められた。9月の台風は一部の地域に生育、収量、品質の低下や施設の破損などの被害をもたらした。10月以後は高温で、生育は順調に経過したが、秋冬野菜で生育が進みすぎもみられた。

2. 冬春野菜

果菜類では1-2月の日照不足により草勢の低下や着

果不良、病害の発生により減収や品質低下がみられたが、3-4月以後順調な生育を示し収量も平年並みないしやや多かった。キュウリは1月に草勢が低下し、4月から天候の回復と気温の上昇で生育は順調であった。しかし全体的に果形の乱れなど品質は劣った。トマト、ナス、ピーマンは1-2月には落花、生理障害、灰色カビ病の発生で収量は少なかったが、4月以降収穫盛期に入った。スイカ、メロンも2月に着果期となる作型では一部に着果不良を生じたが、全般的には着果と果実肥大は順調で糖度も高かった。イチゴは暖冬で小玉傾向であったが、着色良好であった。出荷量は5月まで順調であった。ソラマメ、インゲン暖冬で、3-5月出しは豊作であったが、エンドウは病害虫の発生や春の高温長雨で収量は上がらなかった。タマネギは順調に生育した。

3. 夏秋野菜

7月の集中豪雨、7-8月の高温乾燥、9月の台風により夏秋野菜は生育不良で減収傾向にあったが、果菜類は価格が高く経過した。キュウリは生育初期の多雨と7-8月の高温乾燥が草勢低下と着果不良を招き減収したところが多かった。メロンの10月収穫ではネットの盛り上がり不良による品質低下があったが、乾燥で糖度は高かった。トマト、ナス、ピーマンは高温乾燥で生育不良や着果・肥大の不良、尻腐れ果の発生、病害発生により収量は低かった。ダイコン、キャベツでは集中豪雨による圃場の流出と病害発生があり、キャベツ、レタスでは高温乾燥による活着、生育・球肥大が不良であった。またハウレンソウやコネギは高温乾燥による発芽不良と立ち枯れで減収となった。アスパラガスは気象の影響を受けず生育収量は順調であった。サトイモは干ばつで生育抑制が著しく、一部枯死し大幅な減収となった地域があった。

4. 秋冬野菜

秋冬野菜は7-8月の高温乾燥により発芽、生育が阻害された。9月には台風の接近した地域で被害を受けた。その後は温暖で生育は回復したが、生育の進みすぎもみられた。キュウリ、メロンは一部に高温害を受けたが全体的には順調に経過した。トマト、ナスは高温乾燥で活着不良や生育の不揃いが生じたが、年内収量は多かった。ピーマンの主産地が育苗期と定植期に台風の被害を受け、その後初期生育がおくれ年内収量は減となった。イチゴは育苗期の集中豪雨とその後の高温乾燥で生育が不良であった。各地とも普通ポット育苗で花芽分化・開花・結実の遅れや不揃いを生じ、定植後は果実肥大が阻害された。ダイコン、ニンジン播種の遅れや発芽不良と初期生育の遅れがあり、その後回復傾向にあったが、減収した。キャベツ、ハクサイ、レタス、タマネギは高温乾燥で育苗期から定植期に生育が遅れたが、暖冬で生育が回復した。しかしレタスでの異常球の発生やタマネギでの生育が進みすぎが一部に見られた。

(野菜・茶業試験場久留米支場)

【果 樹】

1. 常緑果樹

1990年度産の温州ミカン、隔年結果の裏年に当たるため極早生温州を除いて全般に収量が少なく、対前年収量比は早生温州で80%強、普通温州で75%前後であった。極早生温州については、着花量が多かったことから10%程度の増収となった。

発芽時期は、春先の気温が高く推移したため例年よりも10日前後早かったが、4月の気温がやや低かったことから開花期の促進日数は1-5日程度であった。着花量は裏年のため全般に少なかったが、極早生温州については各県ともに着花が多かった。隔年結果性の強い高糖度系温州では、極端な着果不良園が多くみられた。

一次の生理落果は、早生温州でやや多い傾向がみられたが、おおむね平年並みであった。二次落果については、6月中旬以降に高温が続いたことから、裏年で着果量が少ないにもかかわらず遅くまで落果がみられた。これに日焼け果とそれに伴う生理的な裂果が多発したこともあって、産地によっては減収要因となった。

7月中旬から9月上旬にかけての果実肥大が旺盛な時期に、例年と比べて著しく降水量が少なかったため(期間中の各県平均で平年値434mmに対して本年は130mm)肥大不良の傾向がみられたが、9月中旬以降の降雨が多かったことから急速に肥大が進み、収穫果については大玉の傾向であった。着果量の少ない木では、夏秋梢の発生が多くみられた。

果実の成熟については、秋期に肥大が進んだことから減酸は良好であったが、着色は平年並みであった。収穫期の果実糖度は、早生系統でやや高いとする産地もみられたが、全般には平年並みであった。酸含量は平年並みからやや低く、着色は平年並みからやや良好という産地が多かった。普通温州については、浮皮果の発生が多くみられた。なお、本年は糖度向上を目的としたマルチ栽培の普及が著しく、果実品質は良好で市場価格も高かったことから、今後更に増加するものと予想される。

温州ミカンの病虫害としては、各県ともにカメムシの発生が著しく、産地によってはハダニ、ヤガ、黒点病などの被害も多かった。

中晩柑のうち甘夏については、糖度、着色等は平年並みであったが、果実肥大が良好で酸含量も低かった。収量は平年並みであった。伊予柑は、収量、品質ともに平年並みであった。ポンカン収量はやや良で、品質面では酸含量が高い傾向にあった。一部で台風によるかいよう病や秋期降雨による水腐れ症の発生がみられた。

ビワの収量は、産地による変動が大きいが前年に比べるとやや少ない傾向にあり、果実品質は糖度が高く玉伸びも良好で優れていた。気象災害としては、地域によって幼果期の寒害がみられ減収要因となった。

沖縄産パイナップルの収量は平年並みで、夏実が中心のため品質は良好であった。一部で台風による収穫遅れから過熟果がみられた。

2. 落葉果樹

多くの落葉果樹では、果実肥大期から成熟期にかけての気象条件が高温少雨で推移したため、果実肥大が劣り小玉果の多い傾向がみられた。

ナシの着果は比較的良好で、開花時期も早かった。果実発育の後半には土壤乾燥が著しく、肥大不良で小玉果が多かった。果実品質では、全般に糖度は高いものの果肉硬度がやや高い傾向にあった。収量は肥大不良のためやや減収の産地が多かった。病虫害では、産地によってカメムシ、ハダニ、うどんこ病等の発生が多くみられた。

ブドウの着花量は平年並みからやや良で着果量も多かったが、高温乾燥で果実肥大が劣っていたため、収量は平年並みの産地が多かった。果実は小粒であったが、糖度が高く食味は良好であった。病虫害は比較的少なかったが、一部でダニ類、うどんこ病等が発生した。

モモは開花期が早く着花量も多かった。収量はやや多とする産地が多く、果実品質は糖度が高く食味良好であった。各産地に共通して多発した病虫害はみられず、地域によって灰星病、縮葉病等の発生がみられた。

クリの着花は平年並みで、収量は産地によって増減の傾向が異なっていた。一部産地では19号台風による落果で収量減となった。果実品質は、小玉果が多くやや不良の傾向であった。病虫害では、シロスジカミキリや実炭そ病の発生が一部にみられた。

キウイフルーツは着花量が多く、開花期の花腐れ細菌病も少なかったため増収傾向にあった。果実品質は平年並みであったが、台風や土壤乾燥で落葉した産地では品質低下もみられた。全般に病虫害、生理障害等の発生は少なかった。

カキは着花量、収量ともに産地間で増減傾向が異なっていた。果実品質は、小玉で着色が遅く糖度も低い傾向にあり、総じて品質は良くなかった。多くの産地で、カメムシが多発して品質低下を助長する傾向がみられた。

(果樹試験場口之津支場)

[茶]

1. 一番茶

1月の気温は平年より低かったが2月から3月下旬までの気温は平年に比べて高く、昨年を上回る暖冬で推移した。しかし、4月以後5月上旬までは平年よりやや低く推移した。1月以降の降水量については、特に3月下旬に降水が多かった外は、ほぼ平年並みに経過し、全体としては適度の降水量であった。

暖冬の影響を受けて、萌芽期は早まり、平年に比べて

北部九州で9～10日、南九州で5～10日ほど早まり、暖冬であった前年に比べてもかなり早くなった。しかし、4月以降の低温で萌芽後の生育は緩慢となり、摘採期は前年並みないしやや早まった程度であった。

茶芽生育期間中に山間部で一部晩霜の被害を受けたが、全般に各地とも茶芽の生育は良好で、収量は平年並みないしやや増収となった。病虫害の発生については、北部九州ではチャノホソガが多発したところがみられ、カンザワハダニの発生もやや多かった。南九州では、暖冬のため越冬ダニの多発したところがみられたが、その他の病虫害の発生は少なかった。

2. 二番茶

一番茶摘採以後の気温、降水量とも各地ともほぼ平年並みに推移した。降雨は、茶芽生育期の5月下旬はかなり少なかったが、その他の時期は平年並みで特に6月上旬ないし中旬にはまとまった降雨があったため、土壤水分は十分であった。

このように気温、降水量に恵まれたため、生育は順調で、収量は平年並みないしやや増収となった。病虫害の発生については、北部九州ではチャノココクモンハマキ、チャノホソガ、カンザワハダニの発生が多かった。南九州でも生育初期にカンザワハダニの多発がみられた。また、生育後期にタンソ病の発生がみられた。

3. 三番茶

二番茶摘採以後三番茶までの気温は、各地ともほぼ平年並みないしやや高めに推移した。降雨は平年に比べて少なかった。このように比較的気象環境に恵まれて、収量は平年並みであったが、早摘みで減収となったところもあった。

第1表 主要茶産地の摘採期及び10a当たり収量

産地名		一番茶		二番茶		三番茶	
		摘採期 月.日	収量 Kg	摘採期 月.日	収量 Kg	摘採期 月.日	収量 Kg
大 隅	本年	4. 24	556	6. 7	469	7. 10	361
	前年	4. 24	543	6. 8	496	7. 15	389
	平年	4. 26	497	6. 11	419	7. 19	336
知 覧	本年	4. 24	494	6. 11	640	7. 16	407
	前年	4. 24	566	6. 9	391	7. 21	293
	平年	4. 26	598	6. 10	522	7. 18	360
川 南	本年	4. 27	642	6. 11	729	7. 17	644
	前年	5. 3	732	6. 16	724	7. 21	428
	平年	5. 3	715	6. 13	727	7. 18	592
彼 杵	本年	5. 2	589	6. 18	459	7. 20	250
	前年	5. 2	529	6. 26	398	7. 31	325
	平年	5. 8	497	6. 26	424	7. 30	284
嬉 野	本年	4. 29	645	6. 17	558	7. 29	350
	前年	5. 1	590	6. 17	545	7. 26	473
	平年	5. 8	613	6. 24	542	7. 31	432

病虫害の発生については、北部九州ではチャノコカクモンハマキ、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ等の多発がみられた。局地的であったが、南九州では輪斑病の多発したところもみられた。

なお、九州における主要茶産地の摘採期及び10a当たりの生産量は第1表に示すとおりである。

(野菜・茶業試験場久留米支場)

〔畜 産〕

1990年2月1日現在の家畜別飼養頭数及び飼養農家戸数を全国と九州地域に分けて表に示した。

1. 肉用牛

1990年2月1日の九州における肉用牛の飼養頭数は867,600頭で、前年に比べて14,200頭の増加(対前年比101.7%)であった。飼養頭数の多い上位3県は、前年同様、鹿児島県(275,900頭)、宮崎県(219,000頭)、熊本県(140,900頭)であり、これら3県で九州全体の73.3%を占めていた。九州は肉用牛の中で乳用種の占める割合が最も低い地域であり、その割合は18.8%で前年度とほぼ同じ割合であった。九州における肉用牛の用途別飼養頭数割合は、肉用種雌牛の割合が高く54.0%(468,100頭)で前年とほぼ同じ割合を示していたが、肉用種雌牛の飼養頭数はやや増加の傾向が見られた。全国での肉用種子とり用雌牛飼養頭数に対する九州で飼育されている子とり用雌牛の頭数割合は45.6%で、依然として九州地域は肉用種の子牛生産基地としての性格が強い。

九州における肉用牛飼養農家戸数は、1990年2月1日で93,500戸であり前年対比で5,200戸減少(-5.3%)しており、従来からの減少傾向が続いている。一戸当たりの飼養頭数は、飼養農家戸数の減少に伴って増加し、9.3頭で前年より0.7頭増加した。全国の一戸当たり平均飼養頭数は11.6頭であり、九州地域の飼養規模が全国よりも小さいが、これは九州地域で繁殖雌牛飼育経営の多いことによるものである。

2. 乳用牛

1990年2月1日現在の九州における乳用牛の飼養頭数は197,400頭で前年より5,000頭増加(前年対比103.0%)しており、前年からの頭数増加傾向が続いていた。九州地域は北海道に次いで増頭割合の高い地域であった。九州地域で飼養頭数の多い上位3県は前年同様、熊本県(63,700

頭)、福岡県(31,400頭)、宮崎県(29,800頭)であった。乳製品全体の需要の伸びはやや鈍化する傾向を見せているが、飲用牛乳の好調な伸びを受けて全国での乳牛飼養頭数はわずかながら増加した。九州では佐賀県のみで100頭の減少がみられた。

1990年2月1日現在の九州における乳用牛飼養農家戸数は6,280戸で前年より160戸減少(-2.5%)した。しかし、減少割合は北海道と並んで全国で最も低く、九州農業における酪農の重要性が示されている。九州における飼育農家一戸当たりの飼養頭数は31.4頭で、前年より1.0頭の増加であった。九州における一戸当たりの飼養頭数は全国平均頭数(32.5頭)よりも少ないが北海道、沖縄、東海地域に次ぐ頭数規模となっている。

九州における1989年(1月~12月)の生乳生産量は約783千tで前年より47千t(全年対比106.4%)増加した。搾乳牛1頭当たりの年間生乳生産量は6,501Kgで前年対比102.7%で、飼養技術の改善、品種改良等により年々1頭当たりの生産量が高くなっている。

3. 豚

1990年2月1日現在の九州における飼養頭数は303.5万頭で前年に比べ4.4万頭増加(+1.5%)しており、全国の増加率(0%)を上回る頭数増加を示した。九州で飼養頭数の多い上位3県は前年同様、鹿児島県(128.4万頭)、宮崎県(75.8万頭)、熊本県(30.9万頭)であり、これら3県で九州での飼養頭数の77.5%を占めていた。牛肉輸入自由化の影響が最も大きいのではないかと懸念されている畜種であり、各県共に飼養頭数の変動が大きく鹿児島県、宮崎県、大分県では飼養頭数が増加し、福岡県、熊本県では大きく減少した。

一時的に高値を示した枝肉価格も概して低価格に推移しており、中小規模飼養農家での飼養中止が多く飼養農家戸数は、全国で7,200戸、九州では1,200戸減少(前年対比-11.7%)した。飼養農家戸数が大きく減少したため、一戸当たりの飼養頭数が増加して規模の拡大が進んでおり、九州での一戸当たり飼養頭数は303.5頭(前年対比36.4頭増加)となった。特に、飼養規模の大きな県は鹿児島県(463.5頭)、大分県(426.7頭)、福岡県(334.0頭)で、これらの県は前年も上位を占めた県であった。

九州各県では品質の優れた銘柄豚を生産するために、系統豚の造成を進めているが、既に造成された6系統に加えて福岡県(大ヨークシャー種)、佐賀県(ランドレース種)、熊本県(ランドレース種)、宮崎県(ランドレー

第1表 家畜飼育頭数及び飼養農家戸数

(1990.2.1現在)

		肉用牛	乳用牛	豚	採卵鶏	ブロイラー
飼養頭数	全国	270.2万(+1.9)	205.8万(+1.3)	1,181.6万(-0.4)	17,698万(-1.4)	15,044.5万(-0.3)
	九州	86.76(+1.7)	19.74(+3.0)	303.5(+1.5)	3,129.3(-1.8)	7,107.0(-0.5)
農家戸数	全国	232.2千(-5.6)	63.3千(-6.1)	43.4千(-14.5)	87.2千(-8.4)	5.5千(-5.2)
	九州	93.5(-5.3)	6.3(-2.5)	10.0(-11.7)	24.3(-8.7)	2.1(-4.3)

注) ()内は対前年比の増減%

ス種）、鹿児島県（パークシャー種）で新しい系統の造成が進められている。

4. 採卵鶏

1990年2月1日における九州での飼養羽数（種鶏を除く）は3,129.3万羽で、前年に比べて57.2万羽減少（-1.8%）した。飼養羽数の多い県は前年同様、鹿児島県（976.9万羽）、福岡県（671.0万羽）、宮崎県（471.0万羽）で、これらの3県で九州全飼養羽数の67.7%を占めた。

九州での飼養戸数は前年に比べ2,300戸減少して24,100戸（前年対比-8.7%）であった。この傾向は10年以上続いている傾向であるが、年々飼養戸数の減少割合が大きくなっている。飼養戸数の減少が大きいため、一戸当たりの成雌飼養羽数は前年より79羽増加して979羽（前年対比+8.7%）となった。九州では福岡県の飼養規模が飛び抜けて大きく、一戸当たり3,780羽であった。

鶏卵の価格は計画生産等の対策によって比較的堅調な卵価で推移した。

5. プロイラー

1990年2月1日での飼養羽数は7,107万羽で、前年に比べて39.1万羽の減少であった。全国の飼養羽数に対する九州での飼養羽数割合は47.2%と非常に高く、前年の46.5%よりもわずかながらその割合が上昇しており、九州地域が日本におけるプロイラーの主要な生産基地であることの色を一層強めた。九州では宮崎県（2,741万羽）、鹿児島県（2,634万羽）の両県における飼養羽数が飛び抜けて多く、この両県で九州全飼養羽数の75.6%、全国の総飼養羽数の35.1%を占めていた。

飼養戸数は例年同様に減少しており、1990年2月1日現在での九州における飼養戸数は2,801戸で前年に比べ93戸減少した。飼養戸数の減少による規模の拡大が進んでおり、一戸当たりの飼養羽数は34,200羽で、前年に比べて1,300羽増加した。

東南アジアを中心とした地域からの鶏肉の輸入は年々二桁以上の伸びを示していたが、平成元年度の伸びはこれまでに比べて小さく9.0%の伸びに過ぎなかった。

高品質鶏肉生産のため既に福岡県、熊本県、鹿児島県で銘柄が作出されているが、現在、佐賀県、長崎県、大分県、宮崎県でも銘柄鶏の造成が精力的に行われている。

（九州農業試験場畜産部）

〔飼料作物〕

1. 作付面積

1990年の九州地域における飼料作物の作付面積は牧草類（永年性、越年性、一年生のイネ科、マメ科を含む）が73,300ha、トウモロコシが28,700ha、ソルガム類が19,800ha、青刈えん麦が8,100ha、飼料用かぶが1,400haであった。飼料作物の作付延べ面積は前年と殆ど変わらなかったが、作物別では前年に比べて牧草類が約100ha増、トウモロコシが約600ha増、ソルガム類が約300ha増、青刈えん麦が約600ha減であり、牧草（主としてイタリアンライグラス）、トウモロコシ、ソルガム等の基幹草種への集中化の傾向は九州地域においてもますます強まっている。

2. 作況

1990年の九州の気象は、平年に比べて2月～3月がやや高温に経過し、4月に一時低温状態になったものの、その後は順調な天候に恵まれた。しかし、6月から9月上旬にかけては、全体として寡雨条件になり、各地とも高温、乾燥に見舞われ、更に9月中旬以降は一転して台風等による多雨、寡照、強風等の厳しい条件にさらされた。以下に主要草種の作況を示した。

牧草：永年及び越年性牧草の1番草の生育は順調に促進され、作柄は平年をやや上回った。しかし、2番草以降は高温、寡雨のために生育が劣り、作柄は平年をやや下回った。また暖地型牧草も寡雨のため、作柄は平年並みかやや下回った。

トウモロコシ・ソルガム：播種後、天候に恵まれたため生育は促進されたが、夏季の高温乾燥、台風による倒伏、病害虫の多発等のために作柄は共に平年並みかやや

1990年の主要飼料作物の作付面積と収穫量

県	牧 草		トウモロコシ		ソルガム		青刈えん麦		飼料用かぶ	
	ha	t	ha	t	ha	t	ha	t	ha	t
福 岡	2,600	144,900	661	32,800	1,050	76,100	145	3,840	26	1,390
佐 賀	1,710	126,100	397	17,100	1,180	69,700	203	10,100	7	383
長 崎	5,100	270,100	1,330	62,600	2,760	175,500	794	34,400	53	2,710
熊 本	16,300	852,400	9,070	444,400	3,110	225,500	497	17,700	308	15,900
大 分	6,900	371,500	1,990	116,000	827	68,300	172	4,300	70	3,220
宮 崎	19,000	1,416,000	8,380	593,300	6,280	428,300	1,120	30,000	523	31,100
鹿 児 島	18,600	1,300,000	6,840	411,800	4,500	328,100	5,140	207,700	430	28,700
沖 縄	3,180	432,600	48	2,900	74	7,110	15	749	—	—

注）農林水産統計速報2-267（農水省統計情報部、平成2年12月）による。牧草の大部分と青刈えん麦、飼料用かぶは1989年秋播・翌年収穫。トウモロコシとソルガムは1990年播種・収穫。

下回った。

青刈えんばく・飼料かぶ：前年の播種期以降、本年の春季まで温暖な気候で経過したため、生育は良好であり、作柄は平年に比べてやや良いし良であった。

(九州農業試験場草地区)

〔養 蚕〕

1. 概 況

1990年度の九州地方における養蚕農家戸数は3,780戸で、前年に比べて270戸(6.7%)減少した。これは前年の減少率(8%)より低いですが、養蚕従事者の高齢化、後継者不足に加え繭価が前年を下回ったことによるものである。掃立卵量でみると本年度は65,000箱で前年より9%減少した。これは前述の要因のほか春の凍霜害、夏の干ばつの影響も起因している。繭の生産(取繭量)は2,150tで前年比7.6%減となり、これまでの減産傾向が続いた。各県においても繭増産に対する諸対策が講じられてきたが、糸価の低迷と養蚕従事者の高齢化によって養蚕農家の休廃止が続いている。また、後継者難等構造的問題も残されている。

2. 作 況

1990年早春は気温が高めで桑の発芽は各県とも平年より7~10日早かったが、その後低温が続いて桑の伸長は

鈍化し、一部地域では凍霜害を受けた。このため、夏蚕用桑にまで食い込んだり、掃立量を減らす地域がみられた。夏秋期は例年になく猛暑が続き、干ばつで枝条の伸長は劣り、葉質も低下した。晩秋期以降は一部の地域で干ばつの影響が残ったが、全般的には枝条の伸長も良好で、葉の硬化も遅かった。病害虫は春期は熊本の一部で縮葉細菌病、鹿児島の一部でヒメゾウムシ、クワハムシの発生をみた。夏秋期は高温のためか例年になくクワノアザミウマが多発した。鹿児島の一部で各蚕期とも桜島火山降灰、熊本では春、宮崎では夏に一部地域で阿蘇火山降灰による被害が発生した。また、台風19、20、21号の影響で長崎、宮崎、鹿児島、沖縄各県の一部で枝条の倒伏や潮風害を受けた。なお、隣接作物からの農業害が局部的に発生した。蚕の作柄は春蚕期は全般に良好であったが、一部の地域で軟化病の発生がみられた。夏秋期は一部の地域で膿病、硬化病、軟化病が発生した。また、高温により飼育経過が短くなって単繭重が軽く、繭質にも影響を及ぼした。晩秋期以降は一部を除き全般的に良好で、繭質も良かった。干ばつ、火山灰、台風、蚕病等による被害量は繭換算で148.1t、被害率で6.1%と前年に比べて5%高く、桑害が前年よりも47.5%多かった。これは春期の凍霜害、夏期の干ばつ等が影響したものと思われる。

(九州農業試験場作物開発部)